



**Data**

監督: ノア・バームバック

出演: スカーレット・ヨハンソン/  
 アダム・ドライバー/ロー  
 ラ・ダーン/アラン・アルダ  
 /レイ・リオッタ/ジュリ  
 ー・ハガティ/メリット・ウ  
 ェバー/アジー・ロバートソ  
 ン/マーク・オブライエン/  
 マシュー・シアー/ブルッ  
 ク・ブルーム/カイル・ポー  
 ンハイマー/ミッキー・サム  
 ナー/アミール・タライ

## 👁️👁️ みどころ

『ROMA/ローマ』(18年)が第75回ベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞したことによって、「Netflix」配信作品が俄然注目! ロバート・デ・ニーロとアル・パチーノが共演した『アイリッシュマン』(19年)は1週間限定だったにもかかわらず、立ち見になるほどの盛況で延長。本作もスカーレット・ヨハンソンとアダム・ドライバーの豪華共演だ。

もっとも、その内容はタイトルと正反対の離婚物語。したがって、双方が弁護士を立てての離婚訴訟の展開を含め、『クレイマー、クレイマー』(79年)と対比すれば、より興味深い。また、中国の四大女優の1人である徐静蕾(シュー・ジンレイ)が主演した張元(チャン・ユアン)監督の『我愛你(ウォ・アイ・ニー)』(03年)と比較すれば、夫婦ゲンカの迫力でも米中が伯仲していることがよくわかる。

弁護士にとっては離婚の成立と養育権の獲得がすべてだが、当事者にとってはその後が大切。『クレイマー、クレイマー』ではあっと驚く意外な結末が待ち受けていたが、さて、本作の結末は・・・?

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■Netflix 配信作が徐々に浸透! ■

2018年の第75回ベネチア国際映画祭で、アルフォンソ・キュアロン監督の『ROMA/ローマ』(18年)が金獅子賞を受賞したことによってがぜん注目されたのが、Netflix 配信作品。Netflix とは、世界190カ国以上で1億3000万人の会員が利用する、(主に)月額定額制の動画配信サービスのこと。Netflix オリジナル作品はその大部分が劇場公開さ

れず、動画配信のみとされている。しかし、Netflix のオリジナル映画が映画祭に出品されることがある。そのため、2017年には劇場公開映画を対象としてきたカンヌ映画祭で審査対象から除外すべきか議論が起き、2018年からは規則改正により Netflix 作品が事実上追放された。他方、Netflix が配信する「映画」は限定された劇場のみで公開されることがあり、近時その本数が増えているらしい。

このような Netflix 作品（映画）は、映画を製作し配給する会社にとっては大きな脅威になる。したがって、映画館では原則的に Netflix 配信作品のチラシはつくらず、その予告編も上映しないから、私は本作については1週間前の上映予定表を見るまでまったく知らなかった。私は毎週月曜日から火曜日に、その週の土日に見る作品を概ね決めていたが、その作業中に本作のタイトルを見て「これは何？」と思いネットで調べると、Netflix 配信作品とのこと。そこで、さらに資料を集めてみると、本作には何とスカーレット・ヨハンソンの名前が！ちなみに、11月23日に観た『アイリッシュマン』（19年）は1週間だけの限定上映の予定だったが、高人気が続いているため、延長が決まった。そのうえ、何と今日は満席で立ち見しかできないとの案内が出ていたからビックリ！『ROMA/ローマ』の時はかなり異端だった Netflix 作品も、徐々に人気が浸透してきているらしい。

## ■□■タイトルとは正反対の離婚物語！あの名作との比較は？■□■

本作は原題が『Marriage Story』なら、邦題も同じ『マリッジ・ストーリー』。つまり「結婚物語」だが、その内容はタイトルとは正反対の離婚物語。離婚映画と聞いて誰でも思い出す名作は『クレイマー、クレイマー』（79年）だろう。同作前半は、メリル・ストリープ演じる妻ジョアンナが失踪した後、ダスティン・ホフマン演ずる夫テッドと5歳の一人息子ビリーとの悪戦苦闘の日々が印象的だったが、後半は双方が弁護士を立てての離婚訴訟の展開になっていく。そこでは、とりわけ養育権の行方がポイントになっていた。そして、そこでのキーワードは「子の最良の利益 (best interest of the child)」だったが、さて、本作は？

本作は冒頭、如何にも Netflix 作品らしく（？）、ニコール（スカーレット・ヨハンソン）の独白から始まる。どうもこれは、互いの長所を文章にして読み上げようという試みらしい。2人の前に座っているのが離婚調停を担当する裁判官なのかどうかは弁護士の私でもよくわからないが、こりゃ有益な試みだ。しかし、その文章を口頭で読み上げることに夫のチャーリー（アダム・ドライバー）は賛成したものの、ニコールの方は頑なにこれを拒否したため、結局そんな試みは実現しなかったらしい。しかし、今でも仲の良さそうな2人が、なぜ今では互いに離婚を希望しているの？

## ■□■妻の不満は？離婚原因は？こりゃ、弁護士は必見！■□■

女優と映画監督との結婚と言えば、岩下志麻と篠田正浩や、小山明子と大島渚のように、

一見華やかで理想のカップルのように思えるが、さて、その実は？私は本作に登場するような離婚専門の弁護士ではないが、弁護士生活46年の中で離婚問題はたくさん担当したし、その手の映画もたくさん見ているので、その処理には自信がある。本作のニコールとチャーリーは、当初は名の売れ始めた女優と無名の監督という関係で、どちらかというとな女性上位だったが、チャーリーが主宰する劇団の評価が高まり、ブロードウェイに進出するようになる中、ニコールの方は次第に主体性を喪失し、夫に従属する関係になっていた（少なくともニコールはそう感じていた）らしい。その点、一方は女優として、他方は映画監督として、それぞれ活躍し続けている岩下志麻・篠田正浩夫妻とは大きく違うようだ。

もっとも、お互いがお互いの立場を理解し、尊重し合っていることは、2人の話しぶりからよくわかる。また、8歳の一人息子ヘンリー（アジー・ロバートソン）を2人とも心から愛していることも十分理解できる。しかし、当初は弁護士を交えず2人だけの理性的な話し合いで円満な離婚をしよう。そう話し合っていたはずの2人だが、ある日ニコールが離婚専門の敏腕女性弁護士ノーラ・ファンショー（ローラ・ダーン）に相談し委任したところから、歯車が大きくずれ始めることに・・・。

突然、ノーラ弁護士から「ある書面の送達」を受けたチャーリーは、ビックリ！そして、期限までの回答を迫られる中、やむなくチャーリーも弁護士に相談したが、その弁護士の対応は？『クレイマー、クレイマー』では後半の離婚訴訟の展開が1つの見どころだったが、それは本作でも同じなので、本作は弁護士必見！

## ■□■弁護士の視点は依頼者の利益！戦略と戦術は？功罪は？■□■

弁護士の仕事は良くも悪くも依頼者の利益のために働き、その手数料（着手金）と成功した場合の（成功）報酬をもらうこと。したがって、優秀で頼りがいのある弁護士とはその視点を自分の依頼者の利益のみに向け、そのために有効な戦略と戦術を立案できる人、ということになる。それは同時に、相手方の不都合な点を徹底的に攻撃し、相手方を追い詰める能力にも通じている。

本作でニコールが依頼した女性弁護士ノーラは、そんな優秀な弁護士の典型だ。他方、チャーリーが当初相談した男の弁護士は、ノーラと同じようなタイプだったうえ費用もバカ高かったから、チャーリーが躊躇したのは仕方ない。その結果、チャーリーは比較的穏健で攻撃型ではなく和解型の弁護士に依頼することになったが、その功罪は？

私が弁護士の目で2人の攻防戦を見ていて面白かったのは、ニューヨークを拠点として働くチャーリーも、今は母親サンドラ（ジュリー・ハガティ）や姉キャシー（メリット・ウェバー）の実家があるロスに戻って、テレビドラマに出演する仕事を始めようとしているニコールも、ヘンリーの養育権を獲得するため、住所をどう定めるべきかについて争うこと。日本でも、原告、被告どちらの住所地で裁判ができるかは、経済的な負担を含めて事実上大きな影響力を持つうえ、離婚訴訟では養育権をどちらに持たせるべきかの判断に

影響を与えることがある。したがって、弁護士の中には本作におけるそんな「論点」がよくわかるし、その点を巡って双方の弁護士が丁々発止のやり取りをするのもよくわかる。しかし、ホントにそれが依頼者の利益なの？本作では一貫してそんな視点（疑問）が提示されるので、そのこともしっかり考えたい。

## ■□■夫婦ゲンカの迫力でも米中が伯仲！その論争に注目！■□■

中国第6世代監督の旗手、張元（チャン・ユアン）監督が描いた「ドキュドラマ」たる『我愛你（ウォ・アイ・ニー）』（03年）（『シネマ17』345頁）のテーマは、犬も食わないはずの夫婦ゲンカだった。そこでは、中国四大女優の1人である徐静蕾（シュー・ジンレイ）が演じた妻・シャオジューのエキセントリックさと激しさが際立っていた。ちなみに、エキセントリックという形容詞を私が知ったのは、吉行淳之介の『砂の上の植物群』という小説と、それを中平康監督が、稲野和子と西尾三枝子を姉妹役で起用した同名の映画（64年）によるものだが、同作で観た、美しい顔にもかかわらず、夫婦ゲンカがエスカレートしていく中、少しずつ露呈してくるシャオジューの本性はまさにエキセントリックそのものだった。そんな同作の評論で私は、「このシャオジューとワン・イーとの夫婦ゲンカの迫力がこの映画のポイントだが、それを脚本にもとづいてやるのではなく、すべてアドリブでやらせたというのが、ドキュメンタリー監督としての張元の面目躍如たるもの・・・」。いずれにしても、こんな美女が、こんなにわめき散らす熱演に要注目！」と書いた。

『我愛你（ウォ・アイ・ニー）』と題された同作では、そんな激しい夫婦ゲンカが描かれていたが、『マリッジ・ストーリー』と題された本作でも、その後半には、双方から弁護士を外した状態で直接話し合いたいという、弁護士としてはあまりお勧めできない状況下での2人の話し合いのシークエンスで、『我愛你（ウォ・アイ・ニー）』に勝るとも劣らない激しい夫婦ゲンカが登場するので、それに注目！もちろん、これは長回しの撮影によるものだが、そこでのスカーレット・ヨハンソンのすばらしい熱演に注目したい。

近時、経済面でも、軍事面でも、そして映画産業の面でも米中の伯仲が著しいが、『我愛你（ウォ・アイ・ニー）』と本作を比べて観ると、夫婦ゲンカの激しさの面でも米中が伯仲していることにビックリ！

## ■□■弁護士は離婚成立がゴール！しかし、当事者は？■□■

本作を観ていると、とりわけ離婚と子供の養育権という夫婦間の微妙な問題を、第三者の弁護士に依頼して解決してもらうことの是非が大きく問われていることがわかる。しかも、ノア・バームバック監督は、当初のチャーリーとニコールとの理性的な会話で語らせているように、弁護士に依頼しない（弁護士に介入させない）解決の方が望ましいと考えていることは明らかだ。そのこともあって、本作に登場する、ニコールが依頼した女性弁護士やチャーリーが相談、依頼した2人のタイプの異なる男性弁護士のどちらをみても、

「これが理想的な弁護士」と思える姿には描かれていない。いくら有能な弁護士であっても、「当事者の利益のため」という大義名分と共に、カネのため、名誉のため、プライドのため、という弁護士のにおいがプンプンしてくるわけだ。もちろん、離婚訴訟になれば最終的な法的判断が下されるのだから、どちらが勝つか、という白黒をつける勝負になってくる。そして、それによって最終的に弁護士の力量が示されるのだから、弁護士が頑張らなければならないのは当然だが、さて、それが当事者の利益になり、当事者の気持ちに添っているの？本作はそれを手厳しく提示しているため、弁護士の私としては少し片身が狭い。

本作に見る弁護士同士の論争、とりわけ住所地を巡って双方の弁護士がそれぞれ自分の依頼者に授ける戦術を聞いていると、すべてなるほどと思えるもの。したがって、チャーリーもニコールもそれに従って動いたのは当然だが、その結果、下された離婚と養育権を巡る裁判所の結論は？『クレイマー、クレイマー』でもジョアンナが申し立てた「養育権の奪還」を巡って激しくかつ不毛な裁判闘争が続いたが、「子の最良の利益 (best interest of the child)」の原則により、テッドが敗訴。子供の養育権はジョアンナの手に移ることになった。たしかにそれは、弁護士や多くの国民感情に合致するものだろうが、同作が大ヒットし、今でも名作として称えられているのは、そのラストに訪れる意外な(?)人間ドラマのためだ。しかして、離婚訴訟である結論が下された後の本作の2人は？

本作のノーラ弁護士にとっては、離婚訴訟で離婚を成立させ、養育権をニコールの手に移すことが職務。そして、それを実現できた時には多額の報酬をゲットできるから、それを目指して闘ったのは当然。したがって、その勝訴はノーラ弁護士のみならずニコールにとっても当然うれしいこと。しかし、そこでの問題は離婚訴訟を担当した弁護士にとっては離婚成立がゴールだが、当事者にとってはそれは1つの通過点に過ぎず、その後の人生の方がもっと大切だということ。しかして、本作にみる離婚が成立し、養育権者が決定した後のチャーリーとニコールの話し合い(?)とその結果は？『クレイマー、クレイマー』の結末の味わい深さにも匹敵する、本作の結末は、あなた自身の目でしっかりと！

2019 (令和元) 年12月13日記